

Title	匈奴西移年表：附・フンネン＝匈奴に関する再考察
Author(s)	内田, 吟風
Citation	東洋史研究 (1936), 2(1): 15-35
Issue Date	1936-10-13
URL	http://dx.doi.org/10.14989/145573
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

匈奴西移年表

附・フンネン＝匈奴に關する再考察

内 田 吟 風

一 緒 論

二 北匈奴年表

三 北匈奴の三轉住に就いて

四 北匈奴の西方發展と Kharu:

五 北匈奴の Kirghiz Steppe 移住に就いて

六 Hunen 北匈奴の Alanen 征服に就いて

七 結 論

一 緒 論

四世紀後期歐羅巴に侵入して猛威を振つたヴォルガ・フンネンが、漢史に見ゆる所謂北匈奴の後裔であることは其兩民族性の類似、名稱の一致北匈奴の西奔フンネンの出現時期の合致等により、古くより歐洲史家の推定せる處であつたが、然し其は勿論情況判斷的論斷に過ぎなかつた。ところが一八九九年 Fr. Hirth 教授 (Über Volga-Hunnen und Hiong-nu, Sitzb. d. Wiss. in München, phil.-hist. Kl.) が、魏書粟特國傳の記事がフンネンの史實を匈奴の名を以て記述してゐることを中心に、種々なる史料を以てヴォルガフンネンは實に北匈奴の西走せるものに外ならないことを立證

して以來、多くの史家の信じて疑はざる處となつてゐるのである。(イ)

斯様な譯でヒルト氏以前は勿論、ヒルト氏自身も北匈奴が支那人に追はれて西方に逃れた顛末に就ては非常に綿密に調査されたのであるが、然し余は未だ之等を以て充分に正確精密なりとは思惟し得ず、従つて又北匈奴のヴォルガフンネン轉易の經過説明にも稍粗笨を免れなかつたと信ずる。又清・沈惟賢氏後漢匈奴表の如きも、北匈奴の事蹟を併記すると雖も殆ど漢廷との交渉に止り、フンネン史に資することは出来ないのである。

本論文は北匈奴の西域經略、歐洲内移動の狀態を、従前よりも明瞭に記述せんことを庶幾したるもので、同時に之によりフンネン匈奴の同一説に對しての情況判斷的證明資料を増加せんと欲したものに外ならない(上述の如くヒルト氏の立證あるも、其根據たる史料の僅少は、今尙情況判斷的資料の支持補充を必須とすること云ふ迄もない)。

(イ) 匈奴フンネンの同一族なりや否や、又フンネン匈奴の種屬に關する古來幾多の研究論争に就ては、他日之を一括して回顧記述したいと思つてゐるから、今茲に多くの紙面を取つて縷述することを避けた。然し唯ヒルト教授はこの *Über Wolga-Hunnen und Hing-nu* 發表の後、更に *Hunnenforschungen* (Keleni Szentle, 1901) 並に *Mr. Kingsmill and the Hing-nu* (*The Journal of the American Society*, Vol. XXX, 1909) を出して前説を強調し一二の小缺點を補正し且つキングスミル氏の反對論を論破したのである。教授の所論に對しては勿論二三の反對論があり、殊にフンネン匈奴同族論確信の上にて推論した *Die Ahnentafel Attilas nach Johannes von Thurocz* (*VI Congrès des Orientalistes*, Leide 1899) の如きは有力な反對論が出で、殆ど否定された形である。乍然、自分は少くとも氏のヴォルガフンネン匈奴説に關しては、之を否定するに足る理由を見出し得ず(それに就ては大體第六節に述べた積である)且つ同教授のフンネン匈奴説發表以後今日多くの學者が其を信じ、特に歐洲の東洋學者の大部分が極東に於ける匈奴其物をも尙フンネンと稱ふことさへ躊躇しない、狀態を否定し得ないものである。尙ヒルト教授以前に同一史料により同様な學説が露西亞東洋學者に提唱されてゐたこと、或は又假令匈奴フンネンの同一を認めるとも其間他族の大なる混種を考慮せねばならぬと爲す説等々に就ては之亦總て他日に譲る。

二 北匈奴年表

【畧字】紀(後漢書本紀) 匈(同南匈奴) 鮮(鮮卑) 超、勇(班超班勇) 固、憲(竇固竇憲) 秉、恭、璽(耿秉耿恭耿璽) 形(祭彤) 蘇(蘇章) 魯(魯恭) 班(班固) 梁(梁慊) 安(袁安) 馮(馮豹) 烏(烏桓) 西(西域序) 莎、疏、後、于(莎車疏勒車師後部于寘) 列傳、袁(袁安後漢紀) 司(司馬彪後漢書) 東(東觀漢記) 魏(魏畧) 裴碑(在バルクル裴岑紀功碑文) 書(三國志所引魏書) 悅(魏書) 史悅殷傳) 者(同者舌傳) 栗(同栗特傳) 夷(晉書康居傳) 志(後漢書天文志)

建武廿四年 48

廿八年 52

廿九年 53

匈奴日逐王比・蒲奴單于に畔き後漢に降り南單于となり、匈奴茲に南北に分る。(匈・紀)
 北匈奴漢に遣使、馬及裘を貢し和親を乞ひ且つ西域諸胡を導て獻見せんと云ふ。漢雜繒の類を厚贈し、諸胡獻見の事を許さず。(匈・紀)

北匈奴遣使前年の如し、漢璽書報答綵繒を送る。(匈)

此頃烏桓(烏・書)及び鮮卑、漢の賞賜を目的に屢々北匈奴を侵掠す。(鮮)

永平三年 60

四年 61

五年 62

六年 63

八年 65

北匈奴、龜茲國(北匈奴に屬し其保護により西域北道に覇)(超)を率て莎車國を討つ。(莎)

莎車于寘に降れるを以て、北匈奴龜茲尉黎焉耆等十五國兵三萬を發し、于寘を攻降す。(莎)

以後于寘、北匈奴の監護下に南道に覇たり。(超)

北匈奴の一軍漢の五原雲中を寇す、南單于の力により擊退。(匈・紀・志)

北匈奴漢に合市を求む、漢恐れて之を許す。(匈)

北匈奴、南匈奴の畔者を迎いせんとして失敗、漢との和平破れ、(匈)西域諸國を脅從して大いに河

十三年 70

西に侵入す。(西・匈奴)

此頃北匈奴伊吾に南呼衍部を置屯せしむ。(袁)

(六〇—七〇北匈奴西域發展第一期)

十六年 73

寶固等所率の漢軍出塞、大いに北匈奴を討つ。(紀・匈奴・固・超・西・志・秉・彤) 固、北匈奴呼衍王を天山、蒲類に擊破し、(紀・袁・司・固・超) 伊吾に漢兵を留屯、(固・紀) 帝宜禾都尉を置く。(西)

北匈奴の一軍雲中漁陽を寇掠。(匈奴志・紀)

班超、于寘善鄯經營、北匈奴の勢力を排す。(超)

十七年 74

班超、疏勒を北匈奴の手より漢に移し、(超・疏) 西域諸國漢に遣子入侍す。(紀・西)

寶固所率の漢軍蒲類海に北匈奴を大破し、車師前後兩部を降す。(固・恭・秉・紀・蘇)

漢・西域都護(陳睦) 戊校尉(耿恭・車師後部金蒲城) 已校尉(關龍・前部柳中) に置き、烏孫漢に歸服す(恭・西・紀・東・司・袁)

十八年 75

北單于西域を回復すべく、左谷蠡王二萬騎を以て車師後部を併吞、戊校尉(耿恭・金蒲城) を攻圍し、(紀・恭・司) 焉耆龜茲をして都護(陳睦) 紀超恭西魯東を攻沒、已校尉(關龍・柳中) を攻圍す。(恭) 龜茲又班超を疏勒に攻む。(超)

建初元年 76

二年 77

漢・都護戊已校尉を廢罷し、戊校尉耿恭迎還さる(都護已校尉既に歿す)(恭・紀・西)

漢・伊吾屯兵を廢し西域を棄つ。(紀・西・超)

北匈奴伊吾に屯兵・西域再び北匈奴の勢力下に置かる。(西)

元和元年 84

北單于漢に交易を求め、大且渠伊莫昔王等牛馬萬餘を齎して漢賈と交易、漢邸舍を設けて厚遇に力む。(例)

(七六一八四北匈奴西域發展第二期)

二年 85

北匈奴大人車利涿兵等率衆漢に降る。(例)

章和元年 87

班超、莎車疏勒を降し、咸西域に震ふ(莎・超・紀)

鮮卑大いに北匈奴の左地に入り、北單于優留を斬り、衆十餘萬を降す。(袁・匈・紀)

此頃北匈奴、鮮卑丁令南匈奴に侵掠せられ、西域亦渴畔、且饑亂あり、漢に降る者前後百三十餘部に達し、大に衰耗す。(例)

永元元年 89

竇憲等所率の漢軍大いに北匈奴を稽落山に破り、私渠北鞬海に追ひ、名王以下萬三千を斬る。(憲・

志・紀・西・匈其他)日逐王等八十一部二十餘萬漢に降る。(憲)

二年 90

北單于遣使朝見を請ひ、漢班固を遣し迎ふ、(紀班・東)會々南匈奴左谷蠡王師子北庭を掩破せしを以て引還す。(例・紀・憲)

漢副校尉を西派、北匈奴を討ち伊吾を奪回す。(紀・西)

三年 91

漢將耿种、北單于を金微山に破り、母闕氏以下名王五千を斬る。(匈・紀・夔)

北單于等遂に遁走、烏孫の地(三)に移住す。③

〔北匈奴右谷蠡王於除鞬、八部二萬餘を率て蒲類海邊(Bar kul)に止り北單于を自稱す(夔・安・匈)〕

〔班超、龜茲溫宿姑墨等を降し(超・袁)、西域都護(龜茲)戊校尉(車師前部高昌壁)戊部候(後部候城)復置(西・馮)〕

四年	92	永元十六年	104	永初元年	107
五年	93	元興元年	105	元初四年	117
六年	94	延平元年	106	六年	119
				延光二年	123
三年	124				

此頃鮮卑、北匈奴の故地に入り、北匈奴の餘種十餘萬落鮮卑に降つて雜居、鮮卑兵と自稱す。(書・鮮)

〔於除鞬款塞、漢之に北單于の璽綬を與へ、中郎將持節衛護す。(紀・匈奴東)〕

〔於除鞬叛畔、漢兵追斬其衆を破滅す。(匈奴・紀)〕

〔班超、龜茲等八國の兵七萬其他を率て焉耆を破り西域五十餘國を服屬す。(西・紀・超)〕

車師後部王涿鞬叛畔、北匈奴に奔る、漢兵追斬す。(後)

北單于漢廷に遣使、和親を求む、漢厚賜するのみ、遣使せず。(匈奴・紀・袁)

北單于使を敦煌に送り、遣子入侍せんと乞ふ、漢唯加賜するのみ。(匈奴・紀・袁)

〔冬西域反叛、都護任尙を圍む、漢救軍を出し、尙等を迎還す。(袁・西・紀・勇)〕

〔漢都護伊吾柳中屯田を廢罷、西域を放棄す。(西・勇・梁)〕

北匈奴復た西域諸國を收屬し、爾後諸國と共に漢の境邊を寇すること十有餘年。(西・勇)

南匈奴日逐王逢侯の衆漢に畔き塞外に出で鮮卑に抄掠せられて遂に悉く北匈奴に歸す。(匈奴・紀)

漢長史索班を西派し伊吾屯田再營を試しも北單于に攻没さる。(西・勇)

此頃北匈奴呼衍王、常に蒲類 (Barkul) 秦海 (Pontus Euxinus, Black Sea) の間を展轉、西域を

專制す。(西・袁)④

〔漢班勇を西域經營に派遣す。(西・勇)〕

(一〇七—一二三北匈奴西域發展第三期)

班勇車師前部を定め、北匈奴伊蠡王を伊和谷に擊破す。(勇)④

永建 元年	四年	125
二年		126
永壽 年間		ca.156
延熹 初年		ca.158
永興 元年	二年	152
		153
永和 二年	四年	135
		137
元嘉 元年	三年	134
		132
陽嘉 元年	六年	131
		132

班勇車師後部王及び北匈奴持節使者を斬り、(勇)車師全部を平定。(後・紀)

班勇北匈奴呼衍王を破り、(後)北單于の從兄を捕斬し、衆二萬を降す。(勇)

北單于自ら萬餘騎を率て車師後部に入る、班勇の軍迎撃、骨都侯を斬り北單于を撃走す。呼衍王ために枯梧水上に徙居す。(勇)

〔班勇焉耆を降し、龜茲疏勒于寘莎車十七國漢に來服、然而烏孫葱嶺以西遂に絶つ。(西)〕

〔漢、復た伊吾に屯田、伊吾司馬を置く。(西・紀)〕

〔漢敦煌太守徐白、疏勒王盤等の兵をして于寘を虜掠、斬首三百級(西)〕

漢の車師後部司馬北匈奴を閼吾陸合に掩撃單于の母季母等を斬り、鹵獲甚大。(後・紀)

北匈奴呼衍王車師後部を侵掠、漢救援する能はず、(後) 此後漢の勢威衰へ西域諸國稍々驕放(西)

敦煌太守裴岑、呼衍王及其衆を斬滅。(裴碑)

呼衍王伊吾に寇し、漢伊吾司馬を蒲類海東に殺し更に伊吾屯城を攻む。漢大軍を出し救ひ、北匈奴

引去。(後)

〔于寘漢に叛き長史王敬を柳中に殺す(西・紀・于)。漢罰し得ず(于)〕

車師後王阿羅多漢の屯軍を攻めて失敗、亡走す。(後・西)

漢戊校尉閼詳、阿羅多が北匈奴の援を語ひ來るを恐れ、王位に迎へ復す。(後)

此頃疏勒龜茲北匈奴莎車烏孫屢々張掖酒泉を犯し住民を掠取す。(袁・季膺)

北匈奴、東部西域を棄て、西の方康居の北(Kirghiz Steppe 北部)に移動す。⑤

(當時殘留せりと思はるゝものは其部族名を二三(悦般・拔也稽等の族)史乘に残すのみ)

延熹九年^頃 ca.166

魏三國初 ca.230

晋初 ca.280

晋永和初 ca.350

寧康二年 375
代建國卅八年

鮮卑檀石槐大いに興り、西烏孫を討ち盡く北匈奴の舊地を掩有し烏孫と隣す。(書・鮮)

北匈奴なほ Kirghiz Steppe に留り、其附近の蠻族を併合す。(魏)^⑤

北匈奴康居の北部 (Kirghiz Steppe 南部、Syrdaria 北岸) を奪ひ、(悦)康居の中心南方に遷る。(夷・

者)^⑤

北匈奴(フン)奄塞(阿蘭 Aorsi Alanen)王を殺し、其國 (Azof, Caucasus 間の地方) を奪ふ。(粟)

フンネン王 Balamir 衆を率て Donau 河邊に侵入す。^⑥

注意 表中の○内に附せる數字は参照すべき本論文の章を示すものである。

(イ) 袁宏後漢紀には滿奴單子とある。漢書匈奴傳を検するに、匈奴内に蒲奴水(丁謙・漢書匈奴傳攻證は之を塔楚河に比定す)あり。單子の名も亦この河名と同一で蒲奴單子とするのが正しいのではあるまいかと考へる。

(ロ) 惠棟曰袁紀作阿修。錢大昭曰疑即於陰健也左當作右。黃山曰安下言烏桓鮮卑新殺北單子今立其弟則二虜懷怒、案南匈奴傳章和元年鮮卑擊北匈奴斬優留單子又永元三年北單子復爲耿种所破逃亡不知所在其弟谷蠡王於陰健自立爲單子遣使款塞竇憲上書立爲北單子朝廷從之似阿修別爲一人乃優留之弟若於陰健之兄是爲嗣單子但逃亡未嘗爲二虜殺也惟袁紀謂阿修誅君之子又與烏丸鮮卑爲父兄之讎則似即爲於陰健故通鑑不更及阿修之名也(王先謙集解)と諸説あり。然れども惟ふに阿修於陰健は別人である。袁宏後漢紀によれば阿修を北單子たらしめることは袁宏の反對上奏により事前に取り止めになつたのである。而て更に後漢書袁宏傳を検討すれば、最初竇憲は左鹿蠡王阿修を北單子たらしむ可く奏請したが袁宏の反對上奏によりて却下された爲、憲は改めて右鹿蠡王於陰健を北單子に奏請し、遂に成立したのであること了解出來、阿修於陰健の別人たること明である。尙白鳥博士は成吉思汗の父也速該の子 Uisiken は匈奴の於陰健と同名なるべく、Dakur 語の uiken, isiken (小の義)であらうと論ぜられた(西域史上の新研究)。

(ハ) 魏書西域傳・同蠕蠕傳

三 北匈奴の III 轉住に就て

北匈奴はこの金微山大敗後直ちに康居の地に遁逃したものと從來考へられて居た。即ち後漢書南匈奴傳及び同耿种傳に『北單于逃走して所在を知らず』と見え、魏書西域傳に至りて漸く『北單于金微山を越へて康居に逃る』と記されてゐるのを認めるが故に、當時北單于是遙か西方康居の地に逃れた爲、後漢の人々は彼の行方を全く知らなかつたが、其後西方よりの報導により魏書編纂の頃までには支那人も漸く北單于が康居に逃れたのであつたことを知つたと見るのであつて、Deguignes 氏、Hirth 教授、白鳥博士等多くの學者は大體斯様に觀察を下した如くである。(Marquart 教授はこの北單于の康居逃亡を前漢に於ける郅支單于の康居移住との混同より生ぜる誤傳であると爲したが、之は同教授が康居を Sogdiana と誤り考へたことに生じた疑であり、且其他には魏書の記事を郅支との混同誤記と爲す何等の證左を提示してゐないのである)。

然るに後漢書を仔細に檢するに、後漢の人々は決して北單于の行方を永く見失つて居たものでないこと、北單于是決して敗戦後直ちに康居に走つたものでないことを考へしめられるのである。それは本表にも明記せる如く永元三年以後漢は西域に於て北匈奴、北單于其物と屢次交渉を有した事、南匈奴傳論、袁安傳に北單于是烏孫に移つたと明記せられてある事(通典亦之に従つてゐる)を發見するからである。而して後漢書の何處にも康居移住の事が記されてゐないのは、後漢人が北單于の行方を全然知らなかつた爲ではなく、却つて後節に述ぶる如く其の康居移住が三國時代末期乃至晋代初期に置かる可く、後漢一代は大體烏孫の地即ち III 河上流域地方に占居してゐたことを物語るものである。事實斯くの如くに考へざる限り、東トルキスタンに於ける後漢と北匈奴との彼れ程の頻繁切實な接觸交渉を殆ど了解し得ないであらう。即ち後漢時代に若し康居(Kirghiz Steppe)の如き遠西の地に北匈奴が移り住んだとすれば、(そうでない

ことは康居方面の狀勢から見ても解かるが、(後節參照)、彼の様な支那西邊に於ける斷えざる漢北匈奴の交渉は殆ど不可解になるからである。且つ北匈奴の遺種にして龜茲(今の庫車)の北に建國し北魏時代には烏孫の西北に於て二十萬の人口を有する單于王國となつた悅般國の成立も、斯様な北單于の烏孫轉住の狀勢を認めることにより、始めて完全に了解し得るものである。^(イ)

要之、北單于是漢軍に擊破せられて、オルコン河西なる單于庭を棄てアルタイ山脈中の一山と思はる金微山を越へて烏孫の地即ちイリ河上流域の一地方に移り住み、其後數十年の間後漢と葱嶺以東の西域諸國に對する覇を爭つた後、多數の殘留者を龜茲の北に遺して遠西キルギス曠野なる康居の地に移動したものと思考せねばならぬ。^(ロ)

(イ)白鳥博士は烏孫に就ての考(史學雜誌一一)に於て、北單于是オルコン河西の單于庭を逃れアルタイ山脈中の一山と思はれる金微山を越へイルチシ上源地に出でタルバカタイを経てバルカシ湖南に達し康居に到つたと考へられ、爲に此の魏書悅般傳の記事と衝突矛盾が生ずるのを遺憾とせられ遂に悅般傳の一部を誤僞とまで考へられた。然し北單于が斯様に先づ烏孫に逃れ且つ長期居住してゐたとすれば魏書の記事とも全然合致して極めて圓滑に解釋できるわけである。尙悅般國が龜茲の北に國を成したのならば其後勃興した鮮卑檀石槐や蠕々の侵寇を必ず受けねばならなかつた筈であるのに、却つて烏孫が受けてゐることは一應不思議ではあるが、然し之亦魏書の文を詳細に検討すれば、北匈奴殘留民の止つた處は始め龜茲であつたが其後國を作つたのは烏孫の西北(悅般國在烏孫西北)であつた事を知り、鮮卑蠕々の侵寇を悅般が受けずに烏孫が受けたのも何等不思議でないことが解るのである。

松井壽男學士「魏書西域傳の批判と悅般國の方位」の所説も亦悅般國當初の位置として見るべきであると思ふ。

(ロ)北庭金微山龜茲烏孫康居等の地の現在地名との比定は總て白鳥博士「烏孫に就ての考」及び同博士「西域史上の新研究康居考」「粟特國考」參照。尙ヒルト教授は北單于是烏孫を通過して直ちに康居に逃れたとしてゐるが、之では不充分である

四 北匈奴の西方發展と Khumi.

東西交通史の一權威 Albert Hermann 博士は其著 *Lou-lan* (1931) に於て、

希臘の地理學者 Strabon は Bactria 王の支配權が Seren と Phrynen に至る迄擴つてゐることを記述してゐる。即ち吾人は茲に *Lou-lan* 史に重要な役割をする二つの中央アジア民族の名を先づ知つた譯である。Phrynen (それは或時は Chunen, Phunen. 又は Phauenen と呼ばれた)こそ匈奴即ち Hunnen——當時 Mongolei 及 Dsungarei の最強民族にして後に支那人の彼にその故地を追はれ、爲に歐羅巴の恐怖となつた Hunnen に外ならぬ。かく Hunnen が蒙古種であるに反し Seren は Pinus が、注意す可くも、紅髮碧眼と記してゐる。積り彼等は疑も無く Arier の子孫である云々。

と述べて居るが、之は古代匈奴の中央アジア進出の状態を示すものである。然し乍ら之は本論の問題としてゐる北匈奴の歐亞境上移轉とは直接關係の無い古い事であるから今茲に深く穿鑿する必要は無い。唯、次に述べる北匈奴に關する歐洲人の知識が生ずる以前にも既に古く歐洲に匈奴の名が知れてゐた一參考に擧げたまでである。

却説、表中に掲げた後漢書西域傳並に袁宏後漢紀の『延光二年(西紀一二三)の頃に至り北匈奴呼衍王は常に蒲類、秦海の間を展轉し西域諸國を專制した。』と言ふ記事は此頃に至り北匈奴の歐亞境上に迄も其の勢力範圍を擴張したことを示すものに外ならぬ。

而してこの事實は Ptolemy が二世紀後半 Bastarnae と Roxolani との間なる曠野に存在した諸部族中に Khunnai なる名を擧げて記してゐること、或又西紀二〇〇年頃 Caspi 國境上の諸蠻族部落を Scythas, Huns, Caspiani, Albani と Dionysius Periegetes が擧げてゐるのと相應じて確實性をより深めらるゝものである。^(イ)

蒲類が Bartkul 海、今の新疆鎮西縣巴里坤湖なることは定説であり、秦海が後漢書李賢の注に「大秦國在西海西、故曰秦海」とあるに依りても、之が Pontus Euxinus 今日黒海なること極めて明白であり、當時北匈奴の根據地は未だ猶東^(ロ)

トルキスタン方面に存したには相違ないけれども（前節北匈奴の轉住參照・此當時漢軍との交渉あつた伊和谷、闐吾陸谷―これは單于の季母母闐氏等が斬馘せられ莫大なる鹵獲があつたことから見ても恐らく單于庭ではなかつたかと思はる―等は現在の何處と確定することは出来ないが、然しその漢軍との交渉状態より見ても左程遠西の地でないこと明であり、殊にこの時漢は葱嶺以西とは全く絶つたのであるから、是等の地が東トルキスタン方面に在つたこと疑ない）然し既に彼等北匈奴の中の若干部族は露西亞ステップ、カスピ國境上に占住し歐人にもその名を知らるゝに至り、北匈奴の大臣―當時其名號の史上頻出より見て一種の東方總督ではなかつたかと思はるゝ―呼衍王は黑海より巴里坤に至る全中央アジアの諸國間を展轉し羈縻の實を擧げてゐたことを認めねばならない。尙袁宏後漢紀殤帝紀に、

自伊吾通車師前部高昌壁北通後部五百里是匈奴西域之門也

とあり、又北匈奴が Ⅲ 地方を先づ根據とした状態より考へても、歐亞を結ぶ彼等の交通路の本道は北道であつたと考へられる。

(Ⅳ) H. H. Howorth, Some Notes on the Huns. (VI Congrès des Orientalistes, Leide 1883), Hirth, Wolga-Hunnen und Hiong-nu 參照。

從來古代の西史の中で民族大移動前にフンネンの事を記してある箇所は多く學者の疑を惹いたのであつて、この Dionysius Periegetes にしろフンネンの名を擧げてゐる爲に Bernhardy は之を三四世紀の交の人と論じたりしてゐるが、其は既にヒルト教授も論じた如く支那史料よりして北匈奴の西進を知れば、之等歐洲古史の所傳を僞であると言ひ去り得ないこと明である。況や前述の如き匈奴の大發展の明かなる以上はである。

(ロ)大秦國が東羅馬を指すものであるのは定説である。従つて秦海が唐李賢注の如く東羅馬東邊の海即ち黑海なること疑を容るゝ地なし。然るに丁謙は後漢書西域傳攻證に於て猥りに李注を否定し、秦海を烏爾本齊西北の阿爾雅泊に比定したけれども、僅か新疆省中の一隅阿爾雅巴里坤間を往復して、如何にして西域諸國を專制し得るか。丁謙の説は全く根據なき謬説と云はればならぬ。

五 北匈奴の Kirghiz Steppe 移住に就て

A、郅支の康居移住との對比 北匈奴の康居移住を考ふる上に於て直ちに思ひ出さるゝのは前漢時代に行はれたるかの匈奴郅支單于の同じ康居移住の事である。この兩者に關しては既にヒルト教授の興味深い對比があるから、茲に抽記して置かう。(但し括弧内は筆者の註記改補)

紀元前五十三年に呼韓邪單于と郅支單于が互に主權を爭ふた時に寧ろ漢國に降つて安樂の暮をするのが上策であらうといふ議を提出した者があると、同時に匈奴民族の大望心の確然と動かぬ隣民族を従へようと云ふ世界史に岐立したる氣象は發現した。……而して此時主戰論者の慷慨したる言は「不可、匈奴之俗本上氣力、而下服役、以馬上戰鬪爲國、故有威名於百蠻、戰死壯士所有也、今兄弟爭國、不在兄則弟、雖死猶有威名、子孫常長諸國」である。

この抗議にも拘らず呼韓邪單于是遂に匈奴の比較的懦弱なる部落を率て漢國に降つた。然しかの閣議の折に現れた精神はアツチラの模範として恥ぢない郅支單于が、漢國に降つた同胞と別れて彼時の計畫を實行した事業に於て發揮せられたのである。郅支は凡て己と接する者を威嚇した。先づ初めにアクスの北天山の麓に都を有した烏孫と戰つて之に勝ち次に北に轉じて烏揭を攻め、さて其兵力を以て西は堅昆を伐ち北は丁令を降し遂に悉く其領土を併せて王庭を堅昆(キルギス)の地に設けた。この時郅支の建てた國の中には種々なる民族を包含して居たが多分此の民族はその後歐洲の方に於てフンネンと云ふ總稱の下に統括せられた諸民族と同じ分子であらう。而してフンネンの名はその王朝の名か但しは勇武不撓の精神を有して支配者に適したる小數の民族の名に相違ない。郅支單于是其後、漢國の使者を殺して彼の國との和睦を失ふたのに加へて漢に同盟したる呼韓邪單于の壓迫に苦んでゐた處へその舅に當る康居王から共に兵力を併せて烏孫を攻めたいと云ふ懇望のあつたのに任せて彼の國に赴くことに決心したのである。さて郅支はキルギスから

康居へ赴く際に寒苦のためにその一部を失ふた。即ち怯弱者の者は後に遺り殘部五百人のみが康居へついで (Talas 河上流域に住居を定めた)^(イ)……鄯支が此處に根據を堅めて勢力は近隣を凌ぐばかりに成り康居王の女と其人民數百人を打殺したので其親姻で而も恩人である康居王でさへも之を畏れにくむ様になつた。漢史に記する所によれば鄯支は闐蘇大宛諸國に命じて貢賦を納めさせたとある。……鄯支は紀元前三六六年に漢兵及其同盟者と戰つて討死したが其の匈奴は蒙古地方より更に同族の來てその勢力を復活する迄は例の堪忍力を以て此新領土を固守したであらうといふことはデギヌと均しく余輩の信する處である紀元九〇年北匈奴が漢兵及南匈奴の兵と稽落山に戰つて敗北を取つた時に大勢の援軍が康居に據つてゐた匈奴の同胞に來る可き機會が現れたのである。……後漢書の記する所のものは無論漢軍の大勝利を示すものである。然し此の敗北を以て匈奴が全く滅びたものならば漢の史家は特に其事を書いたであらうに只匈奴の所在を知らずとのみある處よりみれば彼の時に敵の逃れたものは尠からぬ様に思はれる。^(ロ)北單于是魏書悅般傳にも記される如く康居―嚮きに鄯支單于の身を寄せた康居の地へ移つたのである。鄯支がキルギスの地よりトルキスタンの新領地に移つた時には射力氣力の最も優れたものゝみを連れたといふ事及北單于が西に遁れた時に羸弱の者は天山の火山脈に其南境を接してゐる土地に留つて悅般國と稱へた事などから推して見ると其時より三百年後にフンネンの名を以て世界を驚かした匈奴民族は原民族中で最も氣力に富んだものより成立つてゐたに違ない。かく漢史の二個所に明示せられてある如く怯弱者の者は後に留つて拔群の者が前に進むといふことは匈奴の西方移轉の模型と見るべきものであらう。

暴力を以て數百年の間世界に其名を轟かしたるアルタイ原野の民族が後來大膽不敵の氣力を發揮する匈奴固有の精神を高度に有する國民の骨子となる前に言はゞ豫め篩にかけられた様なものである。フンネンは元來戰鬪と威權を好む少數の團體で凡て人と云はるゝ限りの人をば前後左右の嫌なく引きさらつて之に己が勇猛の精神を吹きこめてフンネンに陶鑄させようと務めた民族である。而して此の民族が紀元前五三年の關議に期せられたもの、即ち「有威名於百蠻、戰

死壯士所有也、雖死猶有威名、子孫常長諸國」といふものに成り上るまでには鍛鍊に鍛鍊を重ねたのである。(據白鳥博士譯文)

北單于の西移と郅支の康居占領との對比は此のヒルト教授の一文に説き盡くされて居る。同教授が前文で強調せる如く匈奴フンネンに於て最も重視すべきものは其不撓不屈の精神である。彼等の物質文明は謂はゞ殆ど全く他民族よりの強奪誅求によるものであつて言ふに足らないのは勿論である。吾人が彼等の研究を爲す上に最も興味を惹き最も緊要なことは彼等の有した物質では無く實に彼等の精神力の發露、それを可能ならしめた制度組織である。

(イ) ヒルト氏は郅支の逃れし康居中の地點をヤクサルテス河下流域とせるも、之は誤で白鳥博士(康居考)の攷定せられし如くタラス流域とせねばならぬ

(ロ) 氏は北單于が金微山逃走後、烏孫に長期止り西域地方に覇を稱した事情を閑却した爲、斯様な想像をする外なかつたのである。勿論北單于は多數の臣民を率て逃れたこと、表中に掲げし北匈奴の其後の活躍漢との西域爭覇により充分認めらるゝ處である。

B、北匈奴のキルギス移住年代 北匈奴が金微山敗北後直ちに康居の地即ちキルギス曠野に走つたものでなく、數十年の間東トルキスタンに中心を置いたものと考ふ可きことは前章『北匈奴の 三 轉住に就て』に於て述べた處であるが、而らば彼等は何年頃に康居の地に移住したのであらうか。既に前章『北匈奴の西方發展と Khunn』に於て略述した如く、北匈奴は西紀一二三年頃には西は黑海東は蒲類に至る全中亞に跨る廣大なる地域を專制したのであるから、康居に對しても既に其頃より當然勢力を及ぼしてゐたと考へられる。従つて茲に彼等の康居移住を論ずるには彼等が東トルキスタンを全く引き拂ひ、實際に康居の地を占居した時代に限定せねばならぬ。而るに表中にも示したる如く、北匈奴は永壽年間を以て漢との交渉は無くなり、東トルキスタンに於ける彼等の活躍の事實は漢史の上に急に記載せられなくなつた。

此頃に至り鮮卑の發展は著しく檀石槐の西部は上谷以西敦煌に達する地方であり、彼は西烏孫を討つて烏孫と隣接するに至り、北匈奴の故地を全く掩有する状態であつたこと（後には蠕々、高車族の發展）は北匈奴の西退の最大原因であつたと見て差支へないであらう。

魏書の云ふ北單于の康居逃走即ち北匈奴が葱嶺以東の西域諸國に對する霸權を棄て、^三の地方を引き拂つて西方キルギス曠野へ移轉したのは、這般の事情より見て表中に示せる如く延熹初年即ち西紀一五八年の頃と攷定することは最も妥當であると考へる。北魏時代に悦般國として知られた北匈奴の遺種が、最初龜茲（庫車）の北に止まり國を建てたのも全くこの延熹初年頃の事と見るべきであらう。尤も北匈奴は此時直ちに康居國の本土を襲奪したものでなく、それは紀元二八〇年頃であつて、恐らく康居の附近乃至外邊地方であつたらうことは次節（C）に於て考察した通りである。

C、北匈奴の移住したキルギスの地點 北匈奴が東部西域を引き拂つて移動し來つた地方は、最初より康居本土即ちシルダリア北岸地方であつたとは考へられない。それは當時の實際知識を大部分の資料として編纂せられたと信すべき魚豢の魏略西戎傳（三國志所引）に、

康居本國無増損也

と明記してあることから、又同じく

〔匈奴〕北丁令、在烏孫西

とあることから推しても、北匈奴が最初移住し來た所は康居本土では無く、その外邊たるキルギス曠野北部、恐らく鄯支單于も嘗て其地を一時の足溜りとした堅昆（キルギス）國の地方であつたと考へられるのである。（魏略に堅昆呼得丁令

習水七千里南車師六國五千里とあるは漢書陳湯傳等より得たる漢代の堅昆の知識を誤つて介入せるのみ、魏初の状態ではない、然れども他の部分は概ね信憑すべきである。）

而らば魏書悦般傳に明記する「北單于の康居シルダリア北岸地方移住」は何年に置く可きか。之に對して直接の文獻

資料は無く情況判斷に俟たねばならぬ。而してそれは専ら康居國自身の狀態を觀るべきであらうが、魏書編纂以前に於て之を求むるに、晋代に於ける康居國首都の南遷の事實こそ全く打つて着けの狀態である。即ち晋初、武帝時代の西域事情を記せる晋書四夷傳には、從來康居の首都は卑闐城（今の Chinkend, Turkestan 附近）であつたのを改めて、遙か南方の蘇薹城（今の Sahr-i-Sabz）と記してゐることである。^(イ)この事實と魏書悅般傳の北單于康居移住なる事實とを相照應し、且つは曹魏時代の康居國の領土増損なかりし狀態とを参照して、キルギス曠野北部に於て勢力を養つてゐた北匈奴が晋初即ち西紀二八〇年の頃に至り遂に康居本土シルダリア北岸地方に雪崩れ込み、嘗ては郅支單于が猛威を振つた其地方に再び匈奴の威權を振ふに至つたと推定することは、史料の缺損する當時の情況判斷として決して不當ではないと信ずる。魏書西域傳が北單于の康居移住を報導してゐると同時に、その康居の後身として者古なる國の存在を教へてゐる。^(ロ)（者古國故康居國在破落那西北去代一萬五千四百五十里太延三年遣使朝貢自是不絕）。者古國が康居の棄てた故地に建てられた新國家であつたことは殆ど疑ないが、それが果して北魏時代に於ても尙北匈奴族の國であつたのか、或は既に北匈奴に代つた他の民族嚙噠の如きものの國であつたのか、それは判らない。

（イ）卑闐城の地位に就ては大宛の貴山城より之を推定さる可きであるが、その貴山城の地位を白鳥博士は Kagan とされ、桑原博士は Khojand と比定されて一致しないけれども、然し其兩者の位置の關係上その何れにせよ卑闐城をチュルキスタン近傍即ちシルダリア北方に比定することに（白鳥博士・康居考）、變更を要するとは考へられず、殊に桑原博士も亦卑闐城はタシケントより遙かに北方に在つたものと主張されてゐる（藤田君の貴山城及び監氏城考を讀む）以上卑闐は唐居國の北部にあつたこと疑なく、従つて康居の都が卑闐より蘇薹に遷つたのは、唐居の中心が遙か南方に退下したことを物語るものであること論を俟たないであらう。何故ならば蘇薹を、Sogd の音譯となす學說を採る共、又唐書の所記を基として Kech=Sahr-i-Sabz となす學說を採る共、何れにせよ其は卑闐より遙か南方であるからである。（尤も白鳥博士（栗特國考）は蘇薹の Sogdiana 地方に非ざることを論斷せられた。然し何れにしても漢書・大宛國北至康居卑闐城千五百一十里と晋書・（蘇薹）大宛西北可二千里の二記事を比較するのみにても兎に角蘇薹が卑闐の南であつた事だけは認めねばならないであらう。尙餘談であるが史記・康居在大宛西北可二千里の記事と漢書

晋書の前二記事を参照して考ふと、最初康居は蘇薤の地を都として居たが、其後勢力を増して北進卑閼を都とすることとなり、晋に至りて北匈奴に追はれて再び前の都の地蘇薤に退いたものと推定できる。

(ロ)者舌國が *Sog* であり、今のタシケントに當ること白鳥博士大宛國考に説かれ、藤田博士亦之を大唐西域記の赭時國即ち石國なりとしタシケントに當つべしと説かれた。康居は北魏時代に既に斯の如き南方地方をも失ひ居たることを思はれる。

六 フンネン(北匈奴)の Alanen 征服に就て

奄蔡國(阿蘭・阿蘭聊國)の Aorsi (Alanen) の比定、又奄蔡の臨める北海の Maeotis Palus (Azof)、粟特國の Sugdak (Crimea)、匈奴忽泥王の Hunnen Hernak (Atila 末子) 比定、北匈奴の奄蔡掩有とフンネンのアラーネン征服との結合、其等を中心として考證したる匈奴フンネンの同一等々に就いては總てヒルト氏(Uber die Wolga-Hunnen und Hing-nu, *Sitzb. d. Akad. d. Wiss. in München, phil.-hist. Kl.*, 1899; Mr. Kingsmill and the Hing-nu, *The Journal of the American Oriental Society*, Vol. XXX, 1909.) の所説を結局最も妥當と認むべきものと信ずる。唯、次の數項は一應述べて置かねばならないものであらう。

A、奄蔡=Aorsi 比定の手續 奄蔡の別名阿蘭が Alan の音譯であるのは何等問題ではない。唯ヒルト氏が奄蔡をも其現在音 Jents'ai、An-tsai を基とし、支那の古代に於て外國語を譯するに尾音 r を常に t・k 又は n を以てせること、及び今日の支那話の始音 ts は昔は s に近き響を有せるものなることより、奄蔡-An-tsai-Ar-sai-Aorsi-Alanorsi と攻定したことは、奄蔡の古音は Am-tsai, Jen-tsai であること云々シュレーゲル氏の説に依つて顛され、従つてマルカルト氏の所説の如く、奄蔡のアラーネン比定は、奄蔡を以て masja-Ka (skt.) mathjaka (ap.) masja ka (aw.) 魚食者即ちクロドス・ストラボンの Massageten であるとなし、アラーネンはマサゲーテンの後裔なること(Amianus Marcellinus) 4

り、奄蔡と Aorsi (Alanen) とを結び合はせしむる (J. Marquart, Untersuchungen zur Geschichte von Iran, Heft II. SS. 84-86, 240; J. J. M. Groot, Die Westland Chinas in vorchristlichen Zeit, S. 16. 参照)。斯様に考へる方が實際後漢書奄蔡改名阿蘭聊國、魏略奄蔡國一名阿蘭なる文句にも、より適應する譯である。

註 白鳥博士は奄蔡の奄の古音は、厭の廣東音漢口音等の例より見て、yem と ap の二音があつて奄蔡は ap-ta(t) と發音せられたと考へられ、之を Plinius に見ゆる Abzoe に當てられた〔尤もマルカト氏はトマシヤク氏同様この不明の ABZOE は ARZOE の誤とした (Marquart, Ibis, S. 85) が、博士は其に賛せられず、猥りに Arzoe に改變する理由なきこととされた (塞民族考)〕のであるが、其以上 Abzoe と Alan の關係奄蔡阿蘭の史實との類似相通等に就ては論ぜられなかつた。

B、ホロート氏の大澤北海に對するヒルト氏との見解の相違 (Groot, Ibid. S. 16.) はホロート氏が康居を Samarkand に局限して考へたる爲に生ぜる誤解であり、(康居の位置に就ては白鳥博士西域史上の新研究康居考を参照せよ)、又史記の無崖なる文句を keine berge Ufer と解釋し uferlos に非ずとすることも亦正しく無く、崖は涯と同様であつて、ヒルトの大澤北海に關する所説は正當である。奄蔡西與大秦接 (魏略) なる遠西の位置を忘れてはならぬ。

C、粟特國 Sudak の比定 後漢書の粟弋國、魏略の屬絲國、晋書の粟弋國は白鳥博士 (粟特國考) によつて中央亞細亞の Sogdak (Sogdiana) なることの疑ふ可らざることが明かにせられた。従つて、

魏書、粟特國在嶺之西、古之奄蔡、一名溫那沙、居於大澤、在康居西北、去代一萬六千里、先是匈奴殺其王、而有其國、至王忽倪、已三世矣、其國商人先多詣涼土、販賣、及克姑藏、悉見虜、高宗初粟特王遣使請贖之、詔聽焉、自後無使朝獻、

周書、粟特國在葱嶺之西、蓋古之庵蔡、一名溫那沙、居於大澤、在康居西北、保定四年其王遣使獻方物、

と見ゆる魏書周書の粟特國も一應中亞のソグドかと疑つて見ねばならぬが、然しそれは (1) 古の奄蔡であること (2) 大澤に

臨むこと(3)康居の西北であること(4)魏の代都より一萬六千里の距離あること(サマルカンドなる悉萬斤國は代を去る一萬二千七百二十里、これらの數字は勿論極めて杜撰なるものではあるが、大體の遠近を知り得る)(5)匈奴が其國を奪つてゐることよりして之が中亞 Sogd、漢史の屬絲粟弋とは又別箇のものであることが明瞭に解るのである。(1)

而して又魏書の該記事の中亞ソグドに對する誤記と爲し得ない理由として(1)魏書西域傳は魏收原著の姿を大體殘し、其記述には大體信憑を置き得る性質なること(2)魏書本紀宋書周書等を檢するに粟特國は魏朝に九回の朝貢を爲し、北周に至つても朝貢してゐる殊に多數の國人が北魏に虜はれて居たことよりしても當時の支那人が粟特國に就きて左程の誤つた知識を有するとは考へられぬこと(3)魏書西域傳にソグデアナを示す悉萬斤國の傳が粟特國と別所に立てられてゐること(4)且つ魏書本紀太和三年西域諸國入貢の條にも吐谷渾……粟特、州逸……悉萬斤等國各遣使朝貢と粟特と悉萬斤とを別記してゐること(5)若し粟特が中亞のソグドならば太和三年後朝貢の絶へる理由がないこと(假りにソグド國の中心が他所から太和三年頃悉萬斤國に遷都としたとしても、それならば小名稱悉萬斤國が消えて大名稱粟特が續がれるであらう。且つ北周保定四年に再び粟特の名が見えるのは其地が極遠で永らく朝貢が杜絶してゐたことを想はしめる)(6)粟特が中亞のソグドであるならば厭噠の襲奪のことが記さる可く、匈奴の亂入が記されてゐる筈がないこと、(當時厭噠に關して支那人は相當の知識を有し匈奴と間違へると思へず、殊に其王名を知りその種人引取の懇請をさへ受けてゐるのである)(7)元史類編に引用した十三州志に「奄蔡粟特各有君長」とあるのは、粟特が中亞に在るを示さず、却つて奄蔡即ち Tanais 河地方の遠西地方内に相接して存在し、唯別々の君長を當時頂いてゐたことを示すものであること。以上七個の事項を擧げ得ると思ふ。

魏書周書の粟特傳内の上掲五個の記事及び此の七個の反證旁證よりして、少くとも魏書周書の粟特のみは中亞のソグド漢史の粟弋屬絲でなく、魏書周書の粟特傳は誤記に非ず正當である。従つて自分は之を主たる資料としてヒルト教授

が粟特 *Sudak*, *Harnak* 匈奴忽倪王の比定フンネンのアラーネン征服と匈奴の阿蘭併合、北匈奴フンネン同一を論述した立場を承認するものである。

(イ) 通典は後漢書粟弋傳の記事と魏書粟特傳の記事とを混ぜ記し粟弋一名粟特と記してゐるのは通典編者の速斷謬斷に過ぎぬ。

七 結 論

以上五章に亘つて曖昧なりし北匈奴の西走、東トルキスタンに於ける其後の活躍、歐洲入境の状況を明瞭にし、且つ魏書周書に見ゆる粟特國はヒルト教授の攷定せる如くクリム半島のスダツクと見て何等支障なきことを論じて、ヒルト教授の立證せるヴォルガフンネン北匈奴同一説に對し、從來よりも一層明確且つ適切なる情況判斷的説明資料を附加し得、更に魏書周書粟特國傳の記載の誤偽ならざることを説き、又奄蔡は其比定の經過を異にするとも、同じくアラーネンなることを述ぶることによりて、該ヴォルガフンネン北匈奴同一説の立證根據の正當なることを主張し得たと信ずるものである。

尙第二章の北匈奴年表には北匈奴と直接關係なき事項をも數箇附加して、後漢の西域經營史の概表としても利用し得られるやう力めた。

(了)